第３回釧路国際生命倫理サマースクール＆ラウンドテーブル　縮小社会研究会シンポジウム報告

小川正嗣

１、概要

２０１６年８月１３日～１７日、北海道釧路国際交流センターにて、研究者の研鑽と市民の啓発を目的とした、「第３回釧路国際生命倫理サマースクール＆ラウンドテーブル」が開催された。この報告書は、その内の１４日に行われた、市民向け公開シンポジウム「縮小社会という新たな選択―生き残るための知恵―」（以下、本シンポジウムと称す）についてまとめたものである。

２、参加者

本シンポジウムの参加者の多くは研究者で、人数は発表者を含め合計１１名であった。

３、講演内容

・講演者１　小川正嗣　講演タイトル「縮小社会を考える」

内容：現在の世界が消費するエネルギーと予測されているエネルギー埋蔵量の比、さらに人口増加と環境の関係から見た縮小の必要性を説明した後、縮小という概念の整理をし、縮小社会へ至るために必要なことをいくつか挙げた。

・講演者２　橋本正明　講演タイトル「生まれざる者―環から外れたモノたち―」

内容：まずはキメラや合成生物、機械の進化の危険性を示唆した。次に話題は医学や医療分野へと移り、クローン生物の扱いや延命治療の是非を問うた。三番目に人間の超人願望に触れ、デザイナーズ・ベイビーやエンハンスメント技術を再考し、遺伝的多様性の重要性を強調した。最後に生命倫理に対して新しい三つの提案をした。それは、食物連鎖の輪のあるべき姿を残す事、環（輪）から外れたものを生み出さないこと、弱者を遺伝的要因や社会的地位、経済的理由で貶めないこと、というものだった。

・講演者３　佐藤国仁　講演タイトル「縮小を生きる」

内容：最初に日本の労働生産性が労働時間とＧＤＰの関係からみてどのように変化しているのかを説明した。さらに縮小といえども、これらを基盤にした合理性のあるものでなければならないことを提示した。次に、日本の中で縮小と拡大のせめぎ合いがあることを説明した。縮小側の例として近江商人の三方よしや、日本経団連行動憲章

の変遷、自動車排ガス規制、フロン廃止、暮らしの手帳などが説明された。
　三つ目の話題として、日本の縮小における先達として今和次郎の紹介がされた。四つ目の話題は、現在の日本の実践的縮小の姿の紹介であった。その内容は、谷根千の活動や釧路市の炭鉱掘りについてであった。最後に縮小社会の姿として生活分科会の活動を報告し、まだ研究会内部でも各々の持つイメージが異なることを述べた後、我々の生活から縮小像を考察する必要性を説いた。

・講演者４　粟屋剛　講演タイトル「人間のエゴ・欲望と縮小社会の可能性」
内容：まず現代の社会は少しの便利のために大きな無駄があることを説明した。例として、トラックが交通事故の大きなリスクを抱えて夜中にペットボトルを運ぶことや、日本の自動販売機の運営に必要な電力の総量が島根原発三基分必要なことなどが挙げられた。さらに今までの歴史を振り返り、人類は今までほとんど縮小を選択したことがないことを指摘した。最後に、人類は今後も縮小を選択せず、技術開発で乗り切ろうとする可能性が高いのではないかという疑問が呈された。

４、全体討論
様々な質問が出て盛り上がった。約５０分の討論を、以下で簡潔にまとめる。
●小川宛ての問い
・問１・・・戦争はどのようなものを想定しているか？持続可能と縮小の違いは何か？
回答・・・前者に対しては、「上陸して侵攻し、敵国の人間を奴隷化し、資源を奪うようなものを想定している」と回答した。後者については、「理念としては同じだ」と回答した。しかし、後者の回答については議論が必要であることを認識した。
・問２・・・縮小社会の発想は面白い。しかし例えば社会保障をなくすだとか、そんなラディカルな提案もあっていいはずである。その方が学問的にも面白いし、盛り上がる。どうか？
回答・・・小川は、「批判も多い」と回答した。学会内で喧嘩をすればいい、という意見が出ると、佐藤が、「学会ではない。社団法人の形をとっている。学会形式でやりたい人もいれば、そうでない人もいる。左寄りの人もいれば右寄りの人もいる、発足して８年経つが、まだまとまりきってはないのが現状である。」と回答した。一応現状を回答したものの、これは縮小社会研究会の議論・研究の方法に関わる大きな指摘のように思われた。縮小社会研究会内で詰めて議論をすることを望む。

●橋本宛ての問い
・問１・・・どのようなものが環から外れたものか？例えばワクチンや人工肉は人工物だが、それはどうか。
回答・・・「ワクチンは元々免疫という人間に備わったものを補う（延長線上の）もの

であるので全く問題は無い。人工肉についての線引きは難しいと思うが、そもそも家畜の肉であれば問題は少ない（部位の培養にしても、クローンからの摘出にしても）。但し、それを培養するための食料には問題が出るでしょう。」と回答した。
・問２・・・シンパシーを感じると前置きした上で、質問が出た。人口の爆発は農業改革（緑の改革）や衛生や栄養学的な改善が大きく寄与しており、延命治療が人口爆発を招いたという指摘は事実無根で的外れではないか？また、胎盤製剤の問題を指摘されたが、そもそも栄養学的には人間の肉の方が人間には合っている（倫理的問題は別として）。もったいないという観点や資源循環の視点からは逆に、縮小社会研究会側から人間の利用という提案が出てもおかしくないのではないか？
回答・・・「御指摘の通りです」と回答した。

●佐藤宛ての問い
・問１・・・日本経団連の行動憲章に、「企業は広く社会にとって有用なものでなければならない」という意味のことが書いてあるが、この文言に実際の意味はあるのか？
回答・・・これに対して、「企業の行動を直接縛るものではないが、理念が間違っていたら正しい行動はあり得ないので、大いに意味がある」と回答した。
・問２・・・三方よしは縮小の具体例なのか？これは商人の道徳であって、縮小ではないような気がする。
回答・・・「縮小そのものの具体例ではなく下地となるものの例である。」と回答した。
・問３・・・持続可能と縮小は同じなのか？
回答・・・「違う」と回答した。これについて、「小川と佐藤は意見が違う」との指摘が出た。

５、感想（小川による）
本シンポジウムは、時間を超過するほど盛り上がった。
シンポジウムの後、参加者の内の４人で、懇親会を行った。意見が一致した部分を一言で述べると、まだまだ縮小社会研究会では議論をすべきところがたくさんある、ということだった。用語について詰めて意味を考えることをしていないから、よく顔を合わせる研究会の会員同士でも食い違う面がたくさんあることがわかった。しかしたくさん質問が出るということは、それだけ問題が浮かび上がるということであるから、今後もこのような機会があれば積極的に参加し、縮小社会の理念を伝えると共に、多くの方から批判を頂くことが大切だと感じた。
また後日、「３人が大きな総論の話をするから各論の問題が分かりにくくなっているのではないか」との助言をもらった。反省点として素直に受け止めたい。さらに別の方からは、「良い研究会だと思う。このような活動こそ大事にしていくべきだ」と激励を頂いた。